

新たな出発点に立つミラノ

他の先進国に違わず、イタリア共和国も経済停滞が続いているが(国民総生産昨年比0,9%減)この状況下において、2015年にミラノ市で開催予定のエキスポ博覧会は風向きを変える絶好のチャンスである。イベントへの投資金額4百万ユーロ、新雇用者7万人が予定されている。去年の春に市が開催都市に選ばれて以来約1年が経つが、“地球に栄養を、命にエネルギーを”と書かれたロゴを、様々なイベントで見かけるようになった。

これらを背景に、昨日、4月22日から6日間開催される今年度のミラノサローネ国際家具見本市の発表が行われた。この会見で、サローネの主催者COSMITとエキスポの密接なコラボレーション(今年からエキスポ開催年2015年までの7年間)が調印された。イタリアの本領である“クリエイションとインダストリーの接続”の重要性を全面に打ち出し、国際レベルでメイド・イン・イタリーを強化し、国のプロモーションを行うおうというのが目的である。

初年度はサローネ全般にわたり、ここ数年の成長分野であるフードデザインと水をテーマにしたデザインが展示されることとなる。建築家たちによる新しいパスタの形のデザインや、スローフードの発祥などの例に見られるように、食を楽しみ、それが生活の中で大きなウエイトを占めるイタリアならではの動きはこれまで見られたが、今後これらがどの方向に進展していくのか非常に楽しみである。



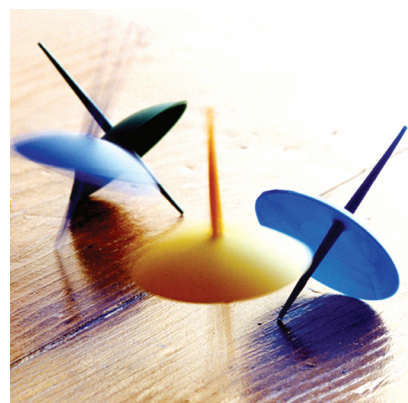
コースター “SIMON-BAR”
デザイナー Lorenzo Palmeri
River社

本場イタリアでは、ミルク入り、ショート、ロング、モロッコ風、カフェイン抜き、などエスプレッソと一口に括れないほど、オーダー可能なバリエーションが存在する。再生紙に印刷された各色の半円(バリエーションの名前が印刷されている)を指で押し内側へ折込むことにより、オーダーをメモし、オーダーミスなくテーブルへ運ばれるという仕組みである。



フルーツボール
“UNA SECONDA VITA”
デザイナー Paolo Ulian

ダイニングテーブルの中心に置かれることを想定してデザインされたセラミック製のボール。欠けたり、割れたりすると使えなくなるセラミックだが、このボールにはミシン目のような連続した穴がデコレーションされており、壊れても、破片が小さなお皿として再利用できる仕掛けになっている。



ティース・ピック “2SPIN”
デザイナー Matteo Ragni
Pandradesign社

コマのような形の爪楊枝。カラフルなプラスチック製。ピュッフェ形式でのオードブルなどをサーブする際に、彩りを添えるだけでなく、再利用できる。

クリエイティブの新しい核—BOVISA

毎年フォーリサローネでメイン会場となるのはトルトーナ地区とミラノ・トリエンナーレだが、今年はミラノの北西に位置するボヴィーザ(Bovisa)地区がDOC(DerganoOfficinaCreativa)と銘打ち、対抗馬として加わる。DOCはこの地区で単独で活動するクリエイター達が、日常の中でコミュニケーションを維持し、コラボレーションしながら地域性を高めていく目的で作られた組織である。

この地区は従来、木工師や鍛冶師などの職人たちが多く住み、また、一昔前までは、チネチッタ(ローマ)の前身である映画製作所Armenia Film、スカラ座の舞台装置と衣装を保管する大倉庫(2003年に火事で一部焼失、後にすべて取り壊し)が機能するなど、ミラノ周辺地区ながら独特の個性を持つ地区であった。

この地区が単なる一地区の域を越え、国レベルで注目を浴びるようになったのは、14年前に始まったミラノ工科大学の移転に伴ってである。工科大学の建築学科と工学科、ボヴィーザ駅をはさみ2つに分かれた新設のキャンパスを中心に、東西南北に点在する工場跡地を利用した再開発が進められている。

開発の先発として、工学部に隣接するガス会社AEMの広大な跡地(4万平米)では、使用を停止した2つのガスタンクの内部(各々1850平米)を利用し、1980年以降に制作されたコンテンポラリーアートに焦点を絞ったエキシビジョンが、約10年前から随時開かれている。近い将来、この跡地は国際コンペで受賞した設計計画に従い、ミュージアムを包括したパブリックスペースとして生まれ変わる予定である。また、2006年にはミラノ工科大学の敷地内にピエールイージ・チェーリ設計によるトリエンナーレ・ボヴィーザ(ミラノ・トリエンナーレの分館—展示面積1400平米)が開館し、2年間で14万人の来場者を記録している。周辺はミラノのグラフィティライター達のウォールペインティングに彩られ、一帯の風景にアクションを与えている。今後も、大学関係者やクリエイター達の流入は続くと思われるが、ミラノ市は引き続き数々の施設を誘致し、この地区を“クリエイションと革新”の中心とする計画である。



Politecnico di Milano

かつてのCeretti&Tanfani社の工場の門をモニュメントとして残したミラノ工科大学建築学部への入り口。その奥には、最新素材のみを用いて設計された塔。内部はオフィスとして使われており、夜には内部からピンクの照明が放たれる。



Triennale Bovisa “BVS”

トリエンナーレ・ボヴィーザの赤いロゴマーク“T”が掲げられているエントランス。ファサードの前には、ミラノサローネの期間中などに、コンサートや大型イベントのための会場と化するオープンスペースが悠々と広がる。



Graffiti

幹線道路からボヴィーザ地区へと誘導する高架下トンネルの壁に、延々と描かれたウォールペインティング。その内部にコンテンポラリーアートを展示する、AEMのガスタンクが正面に浮かび上がる。

デモクラティック・デザインの波

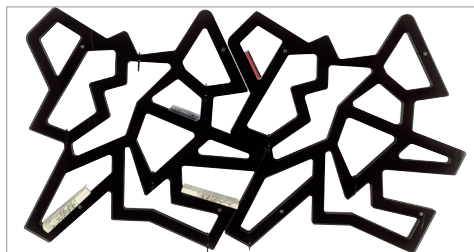
これら行政が関わる動きと一線を画して、個々で活動する30代から40代前半のデザイナー達の動きが非常に面白い。この不況下において、“Design democratic”(民主的デザイン)をコンセプトとし、休みなく作品を発表しているのだ。国際市場に参入する大手の会社は、デザイナーをブランド化する

ことにより、一般層には普及しがたい価格帯であり、不実用的な製品を送り出してきた。これらの反動として、デザイン領域の細分化とマーケットのグローバル化が進む中、ターゲットを絞り込み独自の製品を企画する中小企業と新進デザイナーたちのコラボレーションが主流を作り出している。細部までスキなくデザインされた商品は、富裕層のみならず、誰もが手に入れることができる物であり、毎日をより良く生活するための道具である、との認識が一般化しつつある。デザイナー自身も、従来のマーケティングが効力を持たないことを当たり前とした上で、斬新な方向性を見つけるべく実験開拓を進めている。3年前、20人の新進デザイナーがCOOP(生協)の依頼により、洗濯バケツやトイレブラシなど日用品のリデザインに取り組み、その中から商品化されたデザインが大ヒットとなったことは記憶に新しい。物の存在理由を根本から考え直し、色と形とユーモアで立体化されたデモクラティック・デザインからは、新しい波が伝わってくるのを感じる。この現象は、イタリア人の特質である”危機に直面したら、体裁に構わず、迅速に解決策を見出すことのできる能力”によるものなのだろう。逆境に強い、彼らならではの離れ業である。



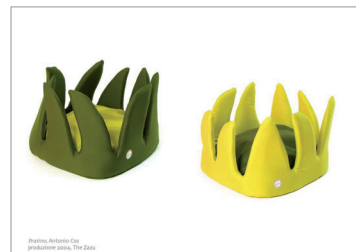
ダイニングテーブル ”IL CAPO”
デザイナー Gumdesign
Silik社

装飾家具を製作する会社の技術を、デザイン領域で生かすことを目的に作り出されたダイニングテーブル。ディナーの中心人物が座る部分は、金色に塗装されたバロック様式の装飾がなされ、ミニマルな残りの部分と強烈なコントラストを作り出している。



ブックシェルフ ”MACRAME”
デザイナー Roberto Giacomucci
Emporium社

不定形のモジュールをビスで組み合わせることで、自由に形を作り出すことができるシェルフ。編み目のような空間の中に、気の向くままに本を重ねていくことで収納が可能。



ペット用ベット ”PRATINO”
デザイナー Antonio Cos
The Zazu社

ペット用品のコンセプトショップから派生したペット用品の内の一つ。”小さな芝生”と名付けられたフェルト生地のは、屋内で飼われるペットへの愛情が感じられる。

執筆者 略歴

池田美雪 インテリアデザイナー

武蔵野美術大学基礎デザイン学科卒

1994年よりミラノ在住

主に個人邸の改築、パブリックスペースの設計に携わる

設計外に携わったプロジェクトとして

”do it jubunde”展(無印良品、ニコレッタ・ブランズィとのコラボレーション)を企画ならび実現

”Soundesign”展(Marangoniファッションスクール主催)にて弦楽器”Caravantar”を発表

写真雑誌”ZOOM”日本版のコーディネイト、翻訳 など

現在はクリエイティブ・コンサルティング会社(デジタルゲーム、ウェブサイト、グラフィックデザイン)の共同経営者として活動しながら、デザイン・アートに関するコーディネイト、翻訳および通訳に携わっている